

## 円通寺古墓

**調査の経緯** 本遺跡は、南北にのびる知多半島の付け根部分、大府市共和町字神戸<sup>こうど</sup>地内に所在する。遺跡周辺は丘陵地のため起伏に富んでおり、調査区は、知多半島全域の丘陵を形成している常滑層群が舌状にのびる末端に位置している。周辺に所在する遺跡には、南北にのびる谷状の地形をはさんだ対岸の丘陵上に、共栄町石器散布地（縄文時代後半）、同一丘陵上の北西部に子安神社遺跡（弥生～古墳時代）などがある。調査は環状2号線建設工事前の事前調査として、平成7年4～7月まで行った。調査区の位置する場所は、南北にのびる県道をはさんで東側丘陵上に位置する円通寺の「もとはか」と伝えられ、近世の村絵図において該当する位置には、「三昧<sup>さんまい</sup>（墓地の意）」という字名が記載されている。したがって、調査区には近世墓が遺存している可能性が考えられたため、道路建設工事に先立ち、県教委文化財課によって試掘調査が行われた。その結果近世墓の存在が確認されたため、(財)愛知県埋蔵文化財センターでは、県教育委員会の委託を受け、発掘調査を行うこととなった。発掘調査面積は、1,500㎡である。

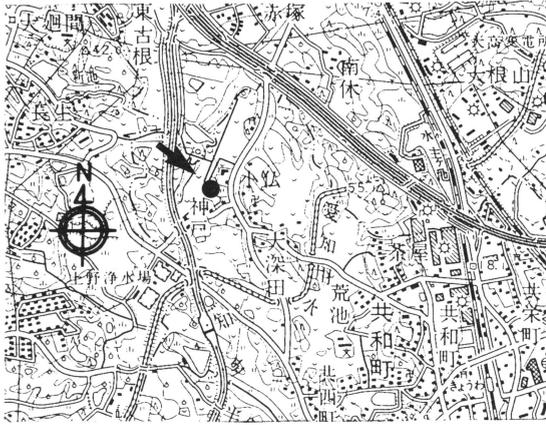
**調査の概要** 調査区の基本層序は、表土の下に部分的に黒色土が客土として確認でき、さらに灰黄褐色極細粒砂が堆積し、基板層は赤褐色シルトである。

検出された遺構は、いずれも表土・黒色土（客土）の下から掘り込まれており、これらの層を機械掘削して取り除いた後、遺構検出作業を行った。調査区周辺は大部分が畑地として利用されているが、隣接地は竹林となっており、竹や笹の根が遺構検出面まで到達していて、検出作業を難航させた。遺構は土坑状の掘り込みが圧倒的に多く100基以上を数え、これに最近まで機能していたと思われる溝が3条加わる。これらの土坑の約4分の1は人骨または骨片が出土しており、残存状況の差はあるものの多くの土坑が墓を目的として掘り込まれた可能性が考えられる。

出土遺物は検出面及び遺構から、煙管や六道銭の可能性がうかがえる寛永通宝、近世陶磁器、土器などである。陶磁器については、瀬戸・美濃産が圧倒的に多く、常滑産が僅かに混じる。これらの出土遺物の時期は、ほとんどのものが19世紀以降のものと思われ、近世前・中期のものは少ない。したがって、調査地点が墓地として利用されたのは近世後期からの可能性が強い。この地については伝承として、明治末年または大正初年頃まで埋葬が行われていたと語られているが、これが事実であれば、約100年程埋葬地として利用されたことになる。

検出された遺構・遺物等については、現在整理検討中である。本遺跡の調査は、城郭・都市遺跡以外では調査事例の少ない近世遺跡調査例として、当該期の未解明な部分を検討するうえで一助となるであろう。

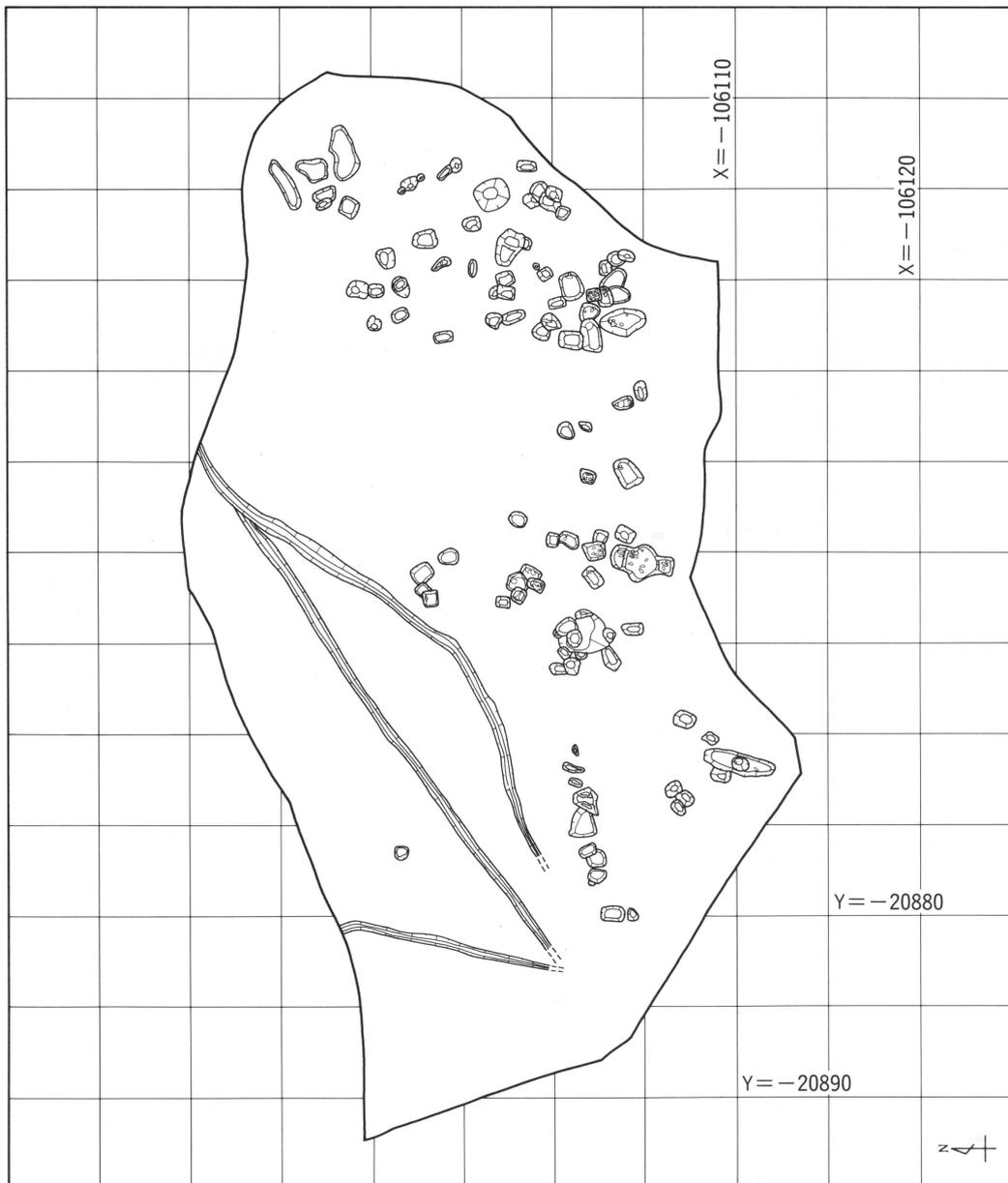
(松田 訓)



第1図 遺跡位置図 (国土地理院1/5万)



第2図 人骨出土状況



第3図 主要遺構位置図